

編集後記

いつものように編集ができあがった。多くの方々の力作がそろったと思う。編集後記を書くことになったので、今回は日頃考えてきたことを少しのべて提案してみたい。

いつも編集会議の度に話題になるのは投稿量と質、原著と症例報告の配分などである。本誌は従来何とかして最高の邦文誌を作ろうと努力してきた。しかしながら、世界に冠たるわが国の消化器外科学の成果をより多くの人々に知ってもらおうとするとどうしても英文誌に報告することになる。誠に残念ながら日本語より英語の方が明らかに共通語として世界の多くの人に通用しやすい。当然いつも問題になる citation index は多くの人を読む報告集つまり英文誌の方が評価されることとなる。したがって、投稿量も多く当然評価も厳しく質が高くなる。

誰でもわかっているこの理屈をわが学会誌はどうするか。ぼつぼつもう一度考えてみる必要はないだろうか。

近年、あらゆるところでグローバルスタンダードという言葉聞く。先にものべたことであるが、わが国の消化器外科学の水準はいまや世界に冠たる評価がある。これは多くの先達が世界にわが国の消化器外科学を発信した結果である。

さて、その本山の学会誌をどうするかということになる。もう一度ゆっくりご検討願いたい。

もう25年も前のことである。昔アメリカにいた頃ボス Dr. JG Fortner に命ぜられてニューヨークで日本の胃癌取扱い規約の英文訳を探したことがある。ボスがいうには「日本人はけしからん。なぜなら、英語文献を読んで世界から情報を集め、俺たちが読めないのを承知で自分たちの仕事は日本語で書いて決して世界に情報を流さない。これではまさに一方通行で不公平である。」

そのとき思ったことに「それでは日本語を勉強してはいかがか。」残念ながら無理な相談であった。

(柿田 章)